

平成27年度「成長分野等における中核的専門人材養成の戦略的推進事業（文部科学省）」に採択
「観光フロンティアとしてのインバウンド観光・マイスビジネス人材育成」

小林雅人 学長就任インタビュー

—私の研究紹介—

吉田朋樹 准教授

総田はるみ 教授

経営情報学科の新たな取り組み

- 「経営情報特論 A」開講と今後の展開（経営情報学科講師 吉田隆弘）
- 「まずはスマホアプリを作ってみよう」経営情報特論 B の実践報告（経営情報学科 准教授 遠山緑生）

「第12回神奈川産学チャレンジプログラム」
商学部 松尾さん白戸さんチームが優秀賞受賞

横浜市鶴見区との包括連携協定書を締結し
各事業が着々と進んでいます。地域産業研究所所長 小林二三夫

学生が企画した日帰りツアープランを一般に向けて販売
観光マネジメント学科 教授 佐々 徹

学術研究会 研究報告会開催

二〇一五年七月一日、柴田悟一前学長の任期満了に伴い、商学部教授の小林雅人氏が七代目の学長に就任されました。

折しも、二〇一六年本学は開学五〇周年を迎えます。この節目にスタートを迎えた小林新学長に、本学へ着任された当時の思い出話から、これから進むべき横浜商科大学の将来像について、今回伺いました。

思い出せば、着任当時からクラスアワーや球技大会など学生との交流は多かった。

高橋（以下T）：

本日はよろしくお願ひします。

今年本学は短大を開学して五〇年目を迎えるわけですが、小林先生が着任されたのは何年前になりますか。小林学長（以下K）：

私が着任したのは二九年前で、開学二一年目の年でした。前年に二〇周年記念で一号館ができ、その時につるみキャンパスの整備が完成したのです。ただ、八、九号館ができたのは、もっと後ですが。T：みどり校舎ができたのはいつでしたか。K：実は私が着任する前、みどりです。二、三年間、学生を教育して来ました。ところが諸事情で使えなくなつたので一時閉鎖しまして、校舎を一新し一九九五年から新入生を迎えて再スタートしました。

T：今日までの本学の歴史を振り返るなかで、特に思い出されることは何でしょうか。K：私が赴任した時は開学二一年目です。ですから、若い先生方が多かったですね。私はもちろん一番若かったのですが、当時私が三十一歳で、教職員の中心が四〇歳代で皆若かったです。

T：それではいろいろと思ひ出がありますか。K：当時球技大会というものがありません。体育館だけでなく、現在教授会をやっているホール、当時は講堂といつていたところも使って卓球や綱引きもやりました。

T：教員も参加したのですか。K：教員もやりました。そのくらい教員も若くてびっくりしましたよ。この大

T：本学の歴史を振り返るなかでこの大学の良さと言ふのは、学生数が少人数だったり、教員と学生の交流を重んじたことでしょうか。K：当時初年次教育として「クラスアワー」という時間を年に三、四回やっています。その時は他の授業は全部休講になるのです。

T：担当する学生は二〇名ほどでした。その後、週一回の「基礎演習」という科目を他の大学に先んじて設けて初年次教育を実施していました。T：そうすると商大の歴史を振り返ると本学の良さは、少人数で学生との触れ合い、コミュニケーションを大事にしてきたところですね。K：そうですね。そういうところを今後大事にしていきたいですね。

学生とのふれあい
コミュニケーションは
商大の歴史、
伝統そのもの。



卒業生との絆、地域とのつながりは残しておくべき商大の伝統。

T：その他に商大の伝統として残していきたいことは何でしょうか。K：卒業生との親密性というか絆の強さということも本学の良さだと思います。昨年、静岡に行った時、卒業生から夜に食事でもという誘いがあり楽しい時を過ごしました。

T：その時は卒業生と私の一対一でしたが、このようなことはよくあることですか。K：その卒業生が県内他大を卒業した同級生にこのことを伝えたところ、その大学では恩師と一対一で飲むなんてありえないと羨ましがっていたそうです。

T：そうですね。そういうところは今後も受け継いでいきたいところですね。さらに、今後本学が果たしていくべきことは何でしょうか。K：まず本学はもとも地域密着型の大学だったと思いますし、今後も地域との連携や地域への貢献をめざしていくべきだと思います。本学はここ鶴見の地で高等学校として出発しましたが、地域の人も高校から大学に変わったらしいとずっと覚えていてくれます。そして地元

産業街や商店街とコラボをずっと続けてきました。T：中華街や野毛でのまちなかキャンパスや大口商店街などでの活動をずっと行ってきました。K：また本学の貿易・観光学科は一九七四年に開設され四〇年以上の歴史があ



小笠原諸島父島でのゼミ合宿にて（2002年8月）

りました。開設当時日本で唯一の名称で、四年制大学の観光系学科としては、日本で一番目に作られました。これは、横浜が貿易都市で観光都市であるという立地から出てきた発想であり、横浜という地域に密着した貿易と観光を教えようという創設者が考えたのだと思います。

T：また、一九九四年には地域産業研究所を創設しましたが、それ以前の二〇年以上続いた横浜駅周辺の消費者動向調査の研究を発展させるために研究所を作ったと聞いています。

【小林 雅人（こばやし まさと）学長 プロフィール】

- 1979年鹿兒島大学水産学部卒業
- 1981年東京水産大学大学院水産学研究所修士課程修了
- 1985年東京水産大学大学院農学系研究所博士課程修了（農学博士）
- 1987年横浜商科大学商学部助教授
- 米国ヴァージニア州立オールドドミニオン大学沿岸海洋物理学センター客員助教授
- 横浜商科大学商学部教授、教務部長、商学部長、入試・広報センター長を経て、2015年7月より学長に就任。
- 水産海洋学会理事、NPO日本ウミガメ協議会監事。
- 専門は水産海洋学、海洋環境学。

小林雅人新学長就任インタビュー



このように、本学は地域と密着し、地域からの要請に答えるべく制度や組織を整備してきた大学であったし、それが着実に根付き広がっているという気がしますね。

「安んじて事を託さるる人となれ」本学の教育の原点は人として生きていく上で欠かせない。

T: それから本学の教育の原点に「安んじて事を託さるる人となれ」という建学の精神がありますが、この点からこれからの課題をお話しいただけますか。

K: 本学の建学の精神は、人として生きていく上では欠かせないことですよ。人が物を買う時に安心できないというのは一番辛いことです。私は年二回調査で、ペルーに行きますが、売っているものがあまりにも安いと「これあぶないのではないか」と、現地の人ですらそれを疑って買わないのです。自分が病気になるくらい死んだりしないために、何でも疑ってかからないといけない。寂



しいことですね。日本は昔から安全な国だと言われていますが、それでも食品偽装事件がありました。世の中には、人が気づかなければごまかしても平気なずる人が必ずいるわけです。

やはり人として、ましてや商売する人はなおのこと、信用は絶対に必要なことです。

だから本学は「商科大学」で「商学部」ですから、人に信用されなくてはビジネスはできないのだということをお話する必要があります。

「安んじて事を託さるる人となれ」という建学の精神は、ビジネスパーソンとしてとても重要かつ基本的なことですよ、社会人としても必要なことです。

社会が求める人材の育成という役割を果たす。

T: ありがとうございます。五〇周年を迎えるにあたって今後本学がどのような方向で発展していくべきかという展望についてお話しただけですか。

K: 商学部だけの単科大学で二九年間も勤めたものですが、他大学にない単科大学の良さや、総合大学にはありえないようなものを特色として打ち出さなくてはならないのではないかとずっと思っ

ています。先ほどの学生やOB・OGとの距離が近いということもそうだけれど、商学の対象領域

小林雅人新学長就任インタビュー



常に新しいものを求めて変化し続ける大学になってほしい。

K: や対象分野は大変広いので、ビジネスはいろいろな分野で展開できるのです。それを学生に伝えて、どんなことでも工夫したいでビジネスになるということや、他大学で教えていないような実践的なビジネスのノウハウなどを教えて起業家の育成をしていければ、他大学との差別化ができるのではないのでしょうか。

T: そのようなところで本学が伸びていく。先ほどおっしゃった地域や社会から課せられた役割を果たしながら、どのような分野でも頑張れるような人材育成をしていくということでしょうか。

K: もちろん時代のニーズも取り込まなければいけません。ですから、貿易は今やどの企業でもして特別なことではなくなつたので、昨年の貿易・観光学科の学科再編で貿易という言葉を外しましょうというところになったのは当然の流れです。

T: また、観光分野でもMICEやインバウンドの課題を中心に教育・研究しましょうということとで内容もこれまでと変わってきて、とても良いことだと思っ

ています。T: 時代の流れに沿うなかで、社会が求める人材の育成という役割を果たしていくということでしょう。



K: ええ。最近大村理事長が少子高齢化を迎えるにあたって、大学として、また商学部としてやらなければならぬことを考えてほしいとおっしゃったのですが、高齢化社会を迎えるということは高齢者を対象とするビジネスが展開されるようになってきます。だからこそ、それを担う人材を育成する必要があります。そのような方向性を考えると、高齢者を対象とする事業というのも当然視野に入るのでないかと思えます。

T: それが新しい学部構想といつところに繋がっていくのでしょうか。

K: やはり商学は幅が広いものですから、どのような分野でも取り込んでいきます。そういう意味で経済学部や経営学部より研究対象がずっと広いのだということですよ。高校生にこの点をもっとアピールしてもいいと思っています。

T: わかりました。最後に五〇周年に向けた先生の思いを一言お願いします。

K: そうですね。やはりビジネスは日々進歩し拡大しているので五〇周年だからといって留まることなく常に新しいものを求めて変化し続ける大学になってほしいと思います。それは小さな大学であればできると思いますが、そういう意味でもっともっと早く変わってほしいと思っています。

T: インタビューを終えて、商学科教授 高橋浩。インタビューから確認できたことは、本学がこれまでの五〇年間の歩みの中で培ってきた良き伝統である。少人数制で学生とのコミュニケーションとOB・OGとの絆を大事にしてきたこと、また地域との連携のなかで歩んできたこと、そして「安んじて事を託さるる人となれ」という建学の精神がこれからの本学の発展にとっても意義深いものとなることなどである。開学五〇周年を迎える本学の今後の発展には、これらの伝統を継承しつつ、変貌しつつある時代のニーズに応えて絶えず変革を成し遂げていく必要があるが、これからの本学の船出の舵取りをされる小林雅人学長の本学への強い思い、愛着心に満ちたリーダーシップのもと、全教職員が一丸となり、また同窓生や関係者の方々のお力も頂きながら本学の発展を推し進めていきたいと改めて思いを強くした次第である。

「観光フロンティアとしてのインバウンド観光・MICEビジネス人材育成」

平成27年度「成長分野等における中核的専門人材養成の戦略的推進事業(文部科学省)」に採択されました。



本学は、文部科学省の平成二七年度「成長分野等における中核的専門人材養成等の戦略的推進事業」の職域プロジェクトA(「地域版学び直し教育プログラム」の開発・実証)内にて、テーマ「観光フロンティアとしてのインバウンド観光・MICEビジネス人材育成」として採択されました。

近年、日本において、インバウンド観光やMICEビジネスに対する関心が国や地方自治体においても、あるいは産業界においても非常に高まっており、これらを担うことのできる人材の育成が強く求められるようになってきます。本事業は、観光ビジネスの成長と創造が期待される横浜市をはじめとしたグローバルMICE戦略都市等の先進的観光都市において、観光ビジネスの先端分野、つまり観光ビジネスフロンティアで活躍できる人材の養成を目的とするものです。

このような目的を達成するために、平成二七年度は、eラーニング教材の開発、大学の正規授業や社会人向け公開講座におけるインバウンド観光・MICEビジネス講座の実施、実践型教材「観光ビジネス実践ワークブック」の開発、観光ビジネスガイド「観光ビジネスフロンティア」の作成、地域におけるMICEビジネス実践教育調査等に取り組みました。

二月十九日(金)には、同事業の成果報告会「観光人材育成の新機軸〜新たな観光ビジネスの創造と革新を目指して〜」を品川プリンスホテルにおいて開催しました(一八名来場)。

第一部では、本学が代表機関として取り組んできた平成二七年度事業の報告を行いました。二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて、ますます注目されているインバウンド観光やMICEビジネスに対応できる人材の育成を目的に、



実践的な教材としてワークブックやeラーニングを含む研修プログラムの開発をしたこと、大学や地域での教育について実態調査を実施したことなどを報告しました。



第二部では、本事業にご協力いただいた各分野のフロンティアの方々をお招きしたパネルディスカッションを開催しました。

パネリストは、WEBで新たな旅行体験を提供する会社を大学在学中に立ち上げた株式会社「STORY」のCEOの石田言行氏、JR東日本グループでインバウンド業務に携わる株式会社「ユウトラベル」サービス国内旅行事業本部市場・観光開発室マネージャーの歌川あゆみ氏、グローバルMICE強化都市である札幌でMICEに取り組み公益財団法人札幌国際プラザ コンベンションビューロー担当部長・荻原里子氏、新江の島水族館や池袋サンシャイン水族館のリニューアルをプロデュースした水族館プロデューサー・日本バリアフリー観光推進機構理事長の中村元氏の四名です。



観光ビジネスに携わる人材には、常識にとらわれずに新たな価値を生み出していく力や、「また一緒に仕事をしたい」と思われるような人間力が求められること、また、国際的な信頼を得ることや、地域のプロデューサーとしての役割も求められていることなどが意見として出されました。

最後にコーディネーターである本学の穴戸学教授が、「これからの人材育成で大事なものは、アイデアが生まれていく現場の空気を学生が肌で感じることに、最先端で活躍するフロンティアランナーの声を学生に伝えていきたい。産官学が繋がって新しいアイデアを生み出していきたい。」と締めくくりに、ディスカッションを終えました。

来場された方のアンケートでは、「パネリストの発言に大変刺激を受けた」等、好評の声をいただいております。

また、「eラーニング等の教材に大変興味がある。今後に期待している。」等、本事業への期待の声も寄せられました。

※本事業に関する報告書は、本学公式サイトにおいて公開しております。
<http://www.shodai.ac.jp/frontier/index.html>

同委託事業の一環として標記講座が横浜(12月4日、2月6日於：万国橋会議センター)、札幌(12月4日、1月29日於：札幌市産業振興センター)にて各一回開催しました。

第一回目、受講者は各会場ともに、ミニ交流会を挟みながら午前、午後とそれぞれの都市の取り組みや基本的な観光学、インバウンド観光についての概論講座を受講(別表)し、その後二回目的の講演開催までの間に受講方法等の説明を受けました。

その後、札幌会場の第二回目は、まず、北海道大学商学部大学院観光産業学教授の中鉢令児氏による「観光立国と観光ビジネスフロンティア(発展編)」講座を受講、その後「MICEを軸とした札幌インバウンド観光振興」(コーディネーター：PPO法人コンベンション札幌ネットワーク副理事長 松野淑恵氏、ファシリテーター：GOOD WORK SHOP 溝淵清彦氏)と題したワークショップが開かれ、グループごとに活発に議論が行われました。

様々な職種の参加者が混じったグループで行われたため、議論の中からも皆さんの斬新なアイデアが生まれていたようです。

アンケートでも「ワークショップで様々な職種の方の話を聞けてよかった」、「満足です。時間が足りないくらいでした。」など、好評でした。



【社会人学び直しとしてのインバウンド観光・MICE ビジネス講座】

「MICE 先進都市「横浜・札幌」で学ぶ、観光ビジネスの最先端」を開催



横浜会場の第一回は、慶應義塾大学大学院理工学研究科特任教授の太田正隆氏による講座「観光立国と観光ビジネスフロンティア(発展編)」が行われました。その後、「東京に負けぬ、横浜市のインバウンド観光振興」(ファシリテーター：株式会社JTB総合研究所観光みらい人財研究室長 主席研究員 田中敦氏、コーディネーター：財) 横濱コンベンション・ビューロー 経営部長 岡崎三奈氏)をテーマにワークショップが開催されました。

横浜でのワークショップでも各グループともに活発に議論が行われ、アンケートでも「他の職種の方の話を聞けてよかった」、「このようなワークショップをもっと重ねればよりよい観光事業が作れるのでは」、「時間が足りないくらいでした」などの声をいただきました。両会場ともに盛況を取めました。

札幌会場第1回目講座	
内容	発表者
・「観光立国と観光ビジネスフロンティア(観光概論)」	横浜商科大学商学部 教授 穴戸学氏
・「インバウンド観光論」	札幌国際大学 観光学部 講師 千葉里美氏
・休憩(昼食)情報交換会	同上 穴戸学氏/コーディネーター 西恵里奈氏
・「MICE ビジネス概論」	NPO法人コンベンション札幌ネットワーク理事長 藤田晴氏
・「札幌市のMICEへの取り組み」	財札幌国際プラザ 企画事業部 コンベンションビューロー担当部長 荻万里子氏

横浜会場第1回目講座	
内容	発表者
・「観光立国と観光ビジネスフロンティア(観光概論)」	横浜商科大学商学部 教授 穴戸学氏
・休憩(昼食)情報交換会	同上 穴戸学氏/コーディネーター 西恵里奈氏
・インバウンド観光論	共栄大学客員教授 鈴木勝氏
・横浜市のインバウンド観光への取り組み	財横濱コンベンション・ビューロー 経営部長 岡崎三奈氏

商学部 松尾さん・白戸さんチームが

「第12回神奈川産学チャレンジプログラム」で優秀賞を受賞!



写真左より「幸電子工業株式会社」の吉原（2名）、白戸さん、小林学長、松尾さん、細江先生との記念写真

12月15日（火）にパシフィコ横浜会議センターにて社団法人神奈川経済同友会が主催する「第一回神奈川産学チャレンジプログラム」の表彰式が行われ、本学の松尾彩さん（リーダー・商学科二年）・白戸颯さん（経営情報学科三年）のチームが優秀賞を受賞しました。

「神奈川産学チャレンジプログラム」は、社団法人神奈川経済同友会と神奈川県内参加大学が共同で行っている課題解決型研究コンペで、神奈川経済同友会の会員企業・団体が、日常の経営課題の中から実践的な研究テーマを提示し、これに対し学生が能動的に研究し、実践的で実効性のある解決策をレポートにまとめるものです。

今年度は神奈川県下の二〇大学、二三八チームからレポートの提出があり、審査の結果一五チームが最優秀賞、四二チームが優秀賞を受賞しました。本学からは三チームがレポートを提出し、一チームが優秀賞を受賞しました。

松尾さん・白戸さんチームは、「幸電子工業株式会社」から提示された課題「ウェアラブル機器の可能性と商品アイデア」に取り組み、独居老人の孤独死を防止するためのサービスとしてウェアラブル機器を活用することを提案しました。

他大学ではゼミ単位で取り組むチームが多い中、松尾さん・白戸さんチームは個人のチームとして参加し、本学の細江哲志先生や初年次教育担当の先生方にアドバイスを求めるなど周囲の協力を得ながらこの課題に取り組みました。

その結果、課題を提示した「幸電子工業株式会社」から、「プレゼンに勢いがあり、すばらしかった」との好評価をいただき、見事優秀賞を受賞することができました。

表彰式後の懇親会では本学の小林雅人学長が乾杯の挨拶をおこない、神奈川経済同友会や参加企業に感謝の意を伝えるとともに、受賞チームの学生たちを祝福しました。（学術情報センター 発）

チャレンジプログラムを経験して学生に伝えたいこと

商学科二年 松尾 彩

まずチャレンジプログラムの賞をいただくにあたって、助言して下さった教員の方々や協力をして下さった職員の方々にお礼を申し上げます。

そして今回この機会に、横浜商科大学に限らず学生生活を送っている多くの皆さんにメッセージを伝えられたらと思います。

今回のチャレンジプログラムは、神奈川経済同友会と神奈川県内諸大学が共同で実施しているコンペで、私たちは「ウェアラブル機器の可能性と商品アイデア」という課題に取り組み、独居老人の孤独死を防止するための機器の活用について提案しました。その際「商品」「企画」などを二万字にまとめ、資料提出後プレゼンテーションを行いました。

私たちは人脈も資格もなく、また本当に世間一般の学生より意識が低かったのではないかと思いますし、努力や勤勉が恥ずかしいものだと思っていた時期もありました。

しかし、何か自分を変えなければならぬと思っていたとき、このチャレンジプログラムに参加しないかという話を受けました。

参加を決めてからは正直大変でした。プレゼンの練習まで本当に忙しく、また一方で単位を取得するために勉強しなければならず、教員の方の助言がなければ私たちだけでは課題を達成できなかったと思います。



私たちは本当にギリギリながらも優秀賞を得ることができましたが、私たちが伝えたいことは「努力は必ず報われる」ということです。努力が一回で必ず報われるとは限りませんが、一回努力すれば二回目に繋がり、それを三回、四回と繰り返すことにより初めて努力は報われることを今回私たちは学びました。それゆえ、何かに挑戦することが怖い、どうせ無理だろうと思ってしまう人は、どうか一回頑張ってみて下さい。それで得た経験はすべて自分の糧に必ずなると思います。このことを心の隅に置いていただけたら大変嬉しいです。

「経営情報特論A」開講と今後の展開

経営情報学科専任講師 吉田隆弘



経営情報学科では、「具体的な就職先や業種をなかなか決められない」、「採用面接に自信を持って臨むことができない」などといった学生が就職活動で抱える問題を改善するため、就職活動に間に合う実践成果と自信を持ってもらうことを目的とした科目を2015年度に2科目開講いたしました。これらの科目は、主に1年生を対象にしており、大学入学後の早い段階に楽しくやりがいのある実践機会を提供することで、大学卒業後に社会進出する際にどのような力が必要なのかを知ってもらうことを狙って開講いたしました。開講した科目は、インターネットを利用した商品企画販売をテーマとした「経営情報特論A」とスマートフォンアプリ制作をテーマとした「経営情報特論B」で、いずれも夏季休暇期間の集中講義として実施しました。

「経営情報特論A」は、本学非常勤講師の高橋篤史氏(有限会社OIC)の全面的協力のもと実現した科目で、商品の開発から販売までを実際に体験することで、商品のデザインや発注、販売サイト立ち上げ、ウェブ広告宣伝などといった各プロセスで必要とされる専門的な知識や技術がどのようなものか知るところをテーマとしています。また、これらプロセスを通じて社会人としての仕事を擬似的に体験することで、企業との関わり方や社会人としての心構えを身につけてもらうことも狙いとしております。具体的には、3〜4人の学生がチームを組んで、プロのデザイナーが実際にデザインしたイラストやキャラクターをもとに、「横浜を好きになる」商品の制作と販売を行いました。一年目の2015年度は、合計7アイテムを販売していますが、学生が期待していた通りの売り上げ結果は出せませんでした。講義内容に対する学生の満足度や達成感は比較的高かったのですが、実際の売り上げに反映できなかったことが今後の課題だと思われました。

2016年度は「経営情報特論A」の続編という位置づけで、プロモーション活動を重点的に体験する科目を、主に2年生を対象として新たに開講するので、「経営情報特論A」と合わせてうまく活動することで売り上げも伸び、学生の自信にも繋がるかと考えています。



インターネットを利用した商品企画販売サイト

2015 経営情報学科の新たな取り組み Curriculum

<http://www.shodai.ac.jp/department/management/index.html>

「まずは、スマホ向けアプリを作ってみよう」

「まずは、スマホ向けアプリを作ってみよう」経営情報特論Bの実践報告

経営情報学科准教授 遠山緑生



2015年度の新しい試みとして、経営情報学科では「経営情報特論A・B」という2つの特別科目を、主に1年生を対象として夏休み中の8月に開講しました。両講義とも、鉄は熱いうちに打て」で1年生の早い時期からICT(Information and Communication Technology)のビジネス的な活用を体感できる機会を提供することを目的として開講したものです。



経営情報特論Bでは、大変欲張りな構成となる3段階のプロセスで「スマホアプリの企画と制作」を一気に実践してもらいました。



まず、8月17日〜21日の一週間で、「アイデアを考案して、企画をまとめ、プレゼンする」までの流れを学びました。アプリのアイデアを出した上で、実際の利用状況を想定し、ペーパープロトタイプ(紙とペンで作ったアプリっぽいもの)を作るといったものです。この週は、嘉悦大学の白鳥成彦先生のご協力を頂き、教員一名でのゼミのようなスタイルで実施しました。



次に、8月24日〜28日の一週間で、実際にアプリを作るための技術的知識を学び、制作に着手しました。テクノロジーとしては、HTML/CSS/JavaScriptというウェブページを作る際にも必須となる言語を使ってスマホ向けアプリを作るMonacaという開発環境を使った制作方法を学んでもらいました。この週は、Monaca開発元であるアシナル社のご協力を頂き、専用テキストでアシナル社の生形可奈子先生に講義していただきました。



残りの期間は自主的にプロジェクトを進めてもらい、11月15日に最終発表会を行いました。参加学生のほとんどはプログラミングの初學者ですので、なかなか挑戦的なスケジュールでしたが、各グループ独特の着想に基づいた企画のアプリを、実際にスマホで表示する形でプレゼンしてくれて、盛り上がった発表会となりました。



今回の経営情報特論Bは今後の授業改革・カリキュラム改革のプロトタイプでもあります。2016年度から始まる新カリキュラムの専門科目のいくつかは、今回のプロトタイプ科目の経験を活かした形の実践的な内容とする予定です。

また、2016年度も経営情報特論A・Bを開講する予定です。ご期待下さい。



学生が企画した
「帰りのタープ」を一般に向けて販売

観光マネジメント学科
教授 佐々木 徹

平成二十七年後期に、本学の学生たちから神奈川県内の日帰り体験型ツアープランを募集し、優れたプランは実際に一般の人びとに向けて販売するというプロジェクトが行われました。これは、本学との間で観光振興に関する包括連携協定を締結している近畿日本ツーリスト（KNT）の協力により実現したもので、学生たちから募ったプランを選抜し、同社が神奈川県から委託を受けて運営しているツアープラン募集サイト「神奈川県チカタビ」に掲載して販売するとい

うものです。

昨年一〇月から一月にかけて全学生を対象にツアープランを募集したところ、九チーム（合計二十八名）から応募がありました。提出されたプランはKNTと神奈川県によって審査され、鈴木敬浩君（商学科四年）、細井隼人君、山口崇君（同三年）、鈴木拓己君、戸部開君（経営情報学科三年）が企画した「横浜・野毛の魅力すべてを6時間で体験できる欲張りツアー」が見事に入選。その後、KNTの方々と話し合いを重ねて細部の検討と調整を行い、今年一月「神奈川県チカタビ」にアップされて一般への販売がスタートしました。ちなみに、プランの内容は、「横浜における大衆芸能の拠点施設・横浜にぎわい座での寄席観賞↓野毛のお不動様・成田山横浜別院で完成したばかりの新本堂見学↓横浜にぎわい座で普段



成田山別院で参加者を案内する学生スタッフ

は入れない舞台裏を見学」というものです。募集の結果、八名の応募があり、二月七日（日）にツアーが実施されました。

当日は、鈴木敬浩君、山口崇君をはじめプランの企画に参加した学生たち四名がKNTの社員の方による指導のもとでツアーコンダクターを務め、神奈川県の方も含めた九名の参加者に対して受付

から解散までの案内や指示を全員で分担して行いました。

一般の人びとに販売するツアープランであるために審査のハードルが高く、実施に至ったプランが一つであったことは残念でしたが、企画づくりまでで終わってしまうコンテストとは異なり、学生たちが貴重な体験のできる機会になったと思います。ご協力いただきましたKNTと神奈川県との関係者の方々、そして横浜にぎわい座および成田山横浜別院の皆様深く感謝申し上げます。



横浜商科大学と横浜市鶴見区は、鶴見区から区長、各部門の課長、本学からは理事長、学長、関係者等が出席して「横浜市鶴見区と横浜商科大学との包括連携協定書」の締結について打ち合わせを行い二〇一五年三月二〇日に協定の締結を致しました。

締結の目的は、鶴見区と横浜商科大学との緊密な連携と協力により、双方の持つ知的・人的・物理的資源を有効活用することにより、地域の課題に適切に対応し、活力ある個性豊かな地域社会の発展に寄与することにあります。

協定締結後約一年になりますが、いくつかの事業が進み始めています。本学に観光マネジメント学科が発足したことに伴い、同科の学生を中心に「鶴見区のPR」や「地域の賑わい創出」を目的に区の試みに企画段階から学生が参加して実際の学びと経験を積むことが始まっています。具体的には、鶴見区の歴史、文化、食といったみどころ、食べ処の調査、プロモーション映像制作、区のキャラクター「ワックン」の知名度向上などの取り組みです。

また、横浜商科大学地域産業研究所の研究者を中心に、高齢化する地域の住民に対して鶴見区高齢障害支援課と「エンディングノート」の定着などに取り組んでおり、二〇一五年秋に地域産業研究所が後援して「鶴見区版エンディングノート」を印刷しました。

横浜市鶴見区との包括連携協定書を締結し各事業が着々と進んでいます。

地域産業研究所 所長 小林二三夫



穴戸ゼミ生協力による「東海道ウォークラリー」



鶴見区工業会広報誌の学生記者取材

区内の小・中学校では、教員の補助者として本学で教職課程を学ぶ学生を中心にボランティアに参加しています。具体的には学習ボランティアや校外学習の補助ボランティアなどです。

また、鶴見区工業会を通じて学生が企業を訪問し、社長などにインタビューをして記事を作成し、工業会の会報に掲載をしています。すでに八社の企業を訪問し、学生の視点から各企業の紹介記事を書いています。インタビューは一〇〇年近くの歴史を持つ老舗企業が多く、社長・責任者から企業の社是、社訓を含めて経営・歴史についてお聞きしています。

詳しい内容は、横浜商科大学のブログ <http://www.shodai.ac.jp/blog/regional/> においても紹介をしています。地元企業ということもあり、本学の卒業生が就職している企業が多く、インタビューに卒業生が同席されたこともありました。

今後、鶴見区と本学は、年に2回の協議会を開催して地域社会の発展に寄与する事業を進めていきたいと思いますので、教職員、学生の積極的な提案、ご参加をお待ちしています。



2015年3月20日 包括連携協定書を締結しました。

【本学研究所の書籍】
『よっこそ小売業界の世界へー先人に学ぶ商いのこころー』（商業界）が重版になりました！
3月に、横浜商科大学地域産業研究所が編纂した『よっこそ小売業界の世界へー先人に学ぶ商いのこころー』が商業界から発行されました。おかげさまで大好評をいただいております。このたび重版の運びとなりました。

本書は横浜商科大学地域産業研究所の研究員を中心に2015年から4年間をかけて、新日本スーパーマーケット協会の後援のもと小売業界関係者のご意見を参考に取りました。
「今までになかった小売業の歴史を踏まえた『小売業の教科書』として」「学生が小売業界を理解し将来の進路選定の一助として」「小売業界に従事されている方々が、もう一度小売りの歴史と知識を整理していただき、自らの起業をも視野に入れ日々の業務に励む材料として」「周辺業界の方々へ、小売業に対して共通認識をいただき、協業・提案の際のマニュアルとして」以上を目的として刊行した本です。ぜひ一度お手に取ってください。
※写真は著者の本学地域産業研究所の小林三三夫教授と、伊藤裕久教授です。



【商大キャンパスバザール】

5月10日にオープンキャンパスの舞台となった「商大バザール」が、地元横浜市鶴見区の地域情報サイト「つるみウオッチャーズ」で紹介されました。バザールの詳細レポートのほか、本学佐々ゼミ生や吉田ゼミ生の出展の様子も紹介されています。是非ご覧ください。
http://www.tsurumi-watchers.com/2015/05/post_81.html
商大キャンパスバザールHPはこちら
<http://kanetiv.nev/shodai/>
(5月 日発行)

【国際交流】UPB Japan Visit 学生
来校2015年5月7日海外協定校であるアメリカ・ピッツバーグ大学フランドフォード校より、5名の学生と引率教員（Kristin Asinger）が来校しました。
例年通り、本学を拠点に近隣家庭にホームステイをしながら本学との交流、日本について学ぶことを重点に2週間の研修をおこなっています。（5月9日配信）



【小林三三夫教授ら本学教員二名が第四九回通関士試験委員に委嘱されました】
本学にてクローバルビジネス、貿易、関連の専門分野の研究、教鞭をとられております商学科小林三三夫教授（担当・貿易・ビジネス論他）と石原伸志講師（担当・国際物流論他）の二名が第四九回通関士試験委員の委嘱を受けました。（5月22日発信）



【剣道部】

関東学生剣道選手権大会に出場しました！
5月10日に日本武道館にて開催された、第六一回関東学生剣道選手権大会に、本学の剣道部が出場しました。
一・二年生中心のフレッシュユメメンバーで戦いました。6月7日には神奈川県大会への出場も決まっております。
商大剣道部の今後に期待しましょう。（5月14日発信）



facebook

YOKOHAMA COLLEGE OF COMMERCE

現在、横浜商科大学ではFacebook ページで多数の TOPICS を発信しています。2015年度に発信されたものの中より抜粋して、ご紹介します。Facebook ページの URL はこちら
<http://www.facebook.com/YCCJAPAN/>

【留学生会】
研修旅行！6月日留学生会より月13日、14日に「留學生会研修旅行」の報告が寄せられました。
今年度の留學生会研修旅行は、日本人学生、教職員と一緒に南房総（千葉直下）に行ってきました。初日に訪れた「鋸山日本寺」では日本一を誇る大仏を拝み、岩肌に着目する石仏を眺めながら急な石階段を登り切った先には、絶景が待っていました。
普段、商大の坂で鍛えられている私達とはいえ、大汗をかき



ながらの登山は非常にきつかったです。そのあとの清々しさは格別でした。
宿泊先でのハイライトは、新入生歓迎会を兼ねた交流会。このような趣向で皆を盛り上げるか留學生会役員腕の見せ所です。
今年思いのほか、単純な座布団取りゲームで熱くなり、大いに盛り上がりました。皆真剣勝負、髪を振り乱し一枚の座布団を奪い合合も、一気に交流が深まりました。
二日目は「潮干狩り」と「マザー牧場」。初めて潮干狩り体験をする学生が多く、人が多かつたことにはびっくりしましたが、潮の満ち引きにあわせて目を採る、日本の風物詩を体験できま

した。マザー牧場の散策もとても楽しかったです。毎年このように研修旅行をおこなっています。一般学生の参加も大歓迎です。留學生と交流をしたい学生は、この指とまれ！！（6月17日発信）

【ハンドボール部】
春季リーグ戦優勝！
先日、本学のハンドボール部が春季リーグに出場し、四勝一敗で準優勝を果たしました。
一また、昇格決定戦にも出場しましたが、こちらは惜しくも勝つことが出来ませんでした。（農工大30・21横商大）
しかしながら、春季リーグ戦における得失点差では首位となり、本学二年生の稲部優輝君が合計六六得点で得点王となる活躍を見せるなど、今後の更なる躍進に期待を持てる内容となりました。
これからも引き続きハンドボール部の応援よろしくお願ひします！
春季リーグ試合結果は以下（右の通りです）。（5月26日発信）

29●35vs	麻布大
41○27vs	林大
50○23vs	基大
59○22vs	日工大
57○10vs	芸大

【柴田先生】

ありがとうございます。柴田先生が7月10日をもって任期満了となり、ご勇退となりました。これにともない、柴田先生をお招きして、つるみキャンパスカフェにて教職員一同による、「柴田先生に感謝する集い」が伊藤学部長、総田教授の司会進行の元、和やかに催されました。
伊藤学部長からの感謝の言葉、花束贈呈、柴田学部長からの最後のご挨拶の後、参加した教職員それぞれに柴田学長と在任中からの想い、出語に

花束以上の華を咲かせる、ひとときとなりました。
柴田学長は横浜市大副学長等を歴任したのち、本学にて経営組織論や経営関連の科目で教鞭をとりながら研究に励まれ、二〇二二年（平成23）年七月から本日まで学長として本学の教育・研究活動や教育改革の先陣を切ってこられました。
ご挨拶の中で使われた「為せば成る為さねば成らぬ何事も成らぬは人の為さぬなりけり」のお言葉を胸に刻み、明日からまた一丸となり横浜商科大学を盛り立て、学生たちの可能性を引き出し、育てていきたいと思ひます。
「柴田先生、お世話になりました。そして本学にありがとうございました。」
7月10日配信



【ボランティア同好会】

今年度より新たに発足された、11名の募金活動を行っています。現在は、ネパールへの募金活動を行っており、募金箱を持ちながら声かけをする姿が見られます。また、学内数箇所に募金箱を設置しております。もし見かけましたら、ぜひ募金まで協力下さい。

また、今後様々な活動を行ってゆく予定ですので、是非とも彼らへの応援、協力よろしくお願ひ致します！
7月17日配信

※その後、皆さまのご厚意により日本円 77,777円
USD 18,600ドル
英ポンド 7,699ポンド
もの金額が集まりました。この全額を、2015年11月9日（月）に行われ、本学卒業生エグゼクティブ・パネッティさんによる講演会「ネパールの現状・横浜商科大学の思い」に出場しての会場にて、エゾさんへお渡しさせて頂きました。



【インターンシップ報告】

【インターンシップ報告】 本学と観光分野で協定を結んでい... 「群馬県沼田市」で実施されたイ...



暖差がうまさになるのでは」と話して... そんな特典もありますよー!! 写真は尾瀬市場の様子です。

【野島みふゆさん（商学科一年次生）が特許発明!】 本学商学科一年次生の野島みふゆ...

そのようなき、麵類の水切りや野菜を洗うとき水を張ったボウルに...

材も流れ落ちてしまっ... 度となくあり、お父様も何とかならないだろうかと困っていたそう



そこで、今年に入ってから、野島さんはお父様とともに、ざるの大きさとボウルの大きさや直径との関係、流水の排水経路、そして使用後の収納性（ここがポイント!）

器具が流水と一緒に流れ落ちることなく、水洗いができ、さらに具材の無駄も最小限にとどめることができるようになったことでした。

【鶴見区との包括連携事業】 鶴見区工業会報に「学生記者の記事が掲載されました!」

今年3月に鶴見区と本学は「包括連携協定」を締結し、様々な事業で協力していくことになりました。

このたび、その記事が掲載された「鶴見区工業会報10月号」が届きました!

【国際交流センター】

【国際交流センター】 本学四年生のバーサン、レンツェンハントさんが第... 地区米山学友会の理事として活動して

米山奨学生学友会... は韓国、中国、ベトナム、インドネシア、ネパール、モルゴ

facebook YOKOHAMA COLLEGE OF COMMERCE. 現在、横浜商科大学 Facebook ページでは、学生の動向や大学の様子随時が...



【協定締結】

【協定締結】 飯山幼稚園と「災害時における一時避難場所としての使用に関する協定」を締結しました。

飯山幼稚園と「災害時における一時避難場所としての使用に関する協定」を締結しました。

【かにかやお君 再び!】 神奈川県演習(担当 田尻慎太郎先生)で、神奈川県NPO協働推進課と連携した「教えて、かにかやお先生」の特別授業を実施し、昨年(ひきつづき)「かにかやお君」がやってきました!



まず、神奈川県庁の山根名保子氏からゆるきゃら「かにかやお」の紹介と、かにかやおを活用した県のNPO支援の取り組みについて説明。

次にNPO法人湘南市民メディアネットワークの森康祐氏が同法人の活動紹介と、映像作成の基本的講義をされました。

【かにかやお君 再び!】 神奈川県演習(担当 田尻慎太郎先生)で、神奈川県NPO協働推進課と連携した「教えて、かにかやお先生」の特別授業を実施し、昨年(ひきつづき)「かにかやお君」がやってきました!

【かにかやお君 再び!】 神奈川県演習(担当 田尻慎太郎先生)で、神奈川県NPO協働推進課と連携した「教えて、かにかやお先生」の特別授業を実施し、昨年(ひきつづき)「かにかやお君」がやってきました!

【図書館からのお知らせ】

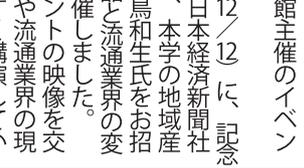
【図書館からのお知らせ】 図書館では、毎年図書館主催のイベントを実施しています。

今年(先週の土曜日)12/12に、記念すべき第10回目として、日本経済新聞社編集局調査部長であり、本学の地域産業研究所研究員である白鳥和生氏をお招きし、「最近のヒット商品と流通業界の変化」と題した講演会を開催しました。

講演会では、パワーポイントの映像を交え、今までのヒット商品や流通業界の現状について大変わかりやすく講演していただきました。また昔の商品蓄付であった商品等を当てるクイズを行うなど、昔懐かしい話題で参加者の皆さんは盛り上がっていました。

【企業連携】 本学商学部「経済政策2」の授業では、横浜で社会課題の解決を目指している様々な団体にインタビューし、発表するというグループワークを行っていただきます。

【企業連携】 本学商学部「経済政策2」の授業では、横浜で社会課題の解決を目指している様々な団体にインタビューし、発表するというグループワークを行っていただきます。



講演会にお越しくださった皆様、本当にありがとうございました。

【企業連携】 本学商学部「経済政策2」の授業では、横浜で社会課題の解決を目指している様々な団体にインタビューし、発表するというグループワークを行っていただきます。

【企業連携】 本学商学部「経済政策2」の授業では、横浜で社会課題の解決を目指している様々な団体にインタビューし、発表するというグループワークを行っていただきます。

【企業連携】 本学商学部「経済政策2」の授業では、横浜で社会課題の解決を目指している様々な団体にインタビューし、発表するというグループワークを行っていただきます。

理論商品学と「繁華街ウォッチング」

吉田朋樹



「私の研究領域の一つである“理論商品学”とは、伝統的な商品学が進めてきた商品の機能・性能、組成、構造といった商品特性の研究や品質（真贋）鑑定や格付けといった商品自体の研究をするものとは異なり、人間（個人あるいは社会）や各種環境と商品との間に生ずる様々な“商品現象”をその研究対象とするものであります。現代の経済社会における商品という存在は、生産サイドではその富の源泉として、熾烈な競争市場下において多様化・多品種化が進められ、その産出では自然その他の環境へ多大な負荷を強いるものである一方、消費サイドでは企業の提案する“生活価値”の受容により、物量的にも文化的にも多彩な生活を実現する手段であるといえます。この商品の生産と消費にかかわって、良くも悪くも様々な商品現象が生ずることになり、その原因・背景や発生メカニズムなどを考察し理論づけていこうとする試みであります。また趣味的研究としては、“繁華街ウォッチング”を続けています（笑）。横浜地区のいくつかの繁華街における商店主や来訪客との交流を通じて、その街の特性や各種商売の流儀、また、繰り広げられる人間模様などをベースに、企業化されない“個人商売の機微”の考察を進めていて、またこれはゼミナールでの学生指導にも繋がるものであります。

現在、本学を会場として月1回のペースで“商大キャンパスバザール”が開催されていますが、平成27年3月よりゼミ生に物販店を企画させ出店しております。ずぶの素人学生がプロの方々に混じって“商売体験”をしているわけですが、当然いろいろな問題が生ずることになります。私としてはわざと細々とした指示を与えずに、想定される失敗を体験してもらうなかで様々な勉強してほしいと考え、学生達と一緒にバザール活動を楽しんでいます。」



Profile	吉田 朋樹 (Yoshiida Tomoki) 商学部 商学科准教授
研究分野	経歴：専修大学経営学研究科後期博士課程・単位取得（1994年）、
理論商品学	横浜商科大学・非常勤講師（1994年～）、
マーケティング研究	横浜商科大学・専任講師（1996年～）、
	横浜商科大学・助教授（2000年～）、
	横浜商科大学・准教授（現在）
主な著作など：	『マーケティング入門Q&A』（共著）、同文館、1998年、他

私の研究紹介

日本・日本語の美しさを伝えたい 総田はるみ

私の専門は、日本語教育学です。日本語・日本文化の美しさに魅かれ、大学院に進みました。大学院在籍中にその伝達手法として日本語教育学に関心をもち、修了後は日本語学習者がいかに楽しくかつ効率よく日本語を習得できるかを考え続けてきました。現在の研究テーマは2つあります。

1つ目は、「観光日本語教育」の構築です。現在、各分野別の日本語教育研究が盛んですが、観光学分野における日本語教育は萌芽状況と言えます。観光学を学ぶ留学生に必要な日本語、海外の観光業界で必要とされる日本語、訪日旅行促進に伴い必要とされる日本語等を分析し、シラバス、コースデザインを設計したいと考えています。

2つめは、「第二言語学習者の日本語ライティング研究」です。話し言葉から書き言葉へ、一般日本語から学術日本語への移行を研究しています。

フランスの詩人ルイ・アラゴンの「ストラスブール大学の歌」に、「教えるとは希望を語ること、学ぶとは誠実を胸に刻むこと」という表現があります。これは大島博光さんという詩人が訳したのですが、この日本語訳が好きです。縁あって、本学で教える立場となりましたが、この言葉の実践を常に心がけるとともに、私自身も学び続ける存在でありたいと思っています。

Profile	総田はるみ (Kaseda Harumi) 商学部 観光マネジメント学科教授 国際交流センター長 学生総合センター副センター長
研究分野	経歴 大学院文学研究科修士課程修了。在日ビジネスマン、留学生等の日本語教育に従事。
日本語教育学 日本文学	国際学友会、国際交流基金日本語センター、東京工業大学、東京大学、拓殖大学等で非常勤講師として日本語教育に従事。
	東京工業大学留学生センター客員助教授を経て、横浜商科大学に勤務。現在に至る。

平成 26 年度 第 45 回学位記授与式

三月二日、本学つるみキャンパスにおいて平成二十五年度第四回学位記授与式が行われました。

学事報告後、学位記が授与され、柴田悟一学長の式辞、大村達彌理事長の祝辞、さらに学長賞の授与が行われ、

商学部商学科一二六名、
同貿易・観光学科四九名、
同経営情報学科六七名

の合計二四二名が本学の学舎を巣立ち、社会人としての一歩を踏み出した。

また式典では同年度における学科別学業成績最優秀者である学術賞、及び顕著なスポーツ活動実績をあげたスポーツ賞、ならびに特別賞の表彰と授与も卒業式においておこなわれました。

なお、表彰者は下記の通り。



平成二六年度「学長賞」受賞者



越水麻有さん



石井はるなさん



梶谷 光さん

学術賞(三名)

商学科

貿易・観光学科
経営情報学科

越水 麻有

石井 はるな
梶谷 光

スポーツ賞(三名)
硬式野球部

清田 陸

内野 浩成
加藤 介馬

(第六〇回全日本大学野球選手権記念大会出場)

空手道部

正手早知子
(第五一回全国空手道選手権大会出場)

特別賞(三名)

商学科

佐々木 琢(税理士試験科目合格)

菊地 郁弥(体育部連合会会長、国際大会出場)

タイ・エフチャンネルカップ、
ソサイチ七人制サッカー)

貿易・観光学科

清都 俊仁

(Lance Open Football Live-side
B12016・2014大会出場
ブラインドサッカー日本代表選手)

平成 27 年度 秋季学位記授与式

また九月一九日には平成二十七年
秋季学位記授与式が行われ、
商学部商学科九名、
同貿易・観光学科二名、
同経営情報学科七名
の合計一八名が、卒業しました。



平成 27 年度 入学式

平成二七年四月一日、平成二七年度の入学式が執り行われ、三一九名の新一年生及び編入学生一六名が新たに横浜商科大学の仲間になりました。当日は、あいにく快晴の天気とはなりませんでしたが、キャンパス内のソメイヨシノは満開で、在学生の先輩たちと新入生を出迎えていました。新入生もこれから新たに始まる学生生活に、

最初は緊張した面持ちで門をくぐってしましたがオリエンテーション、式を終える頃には、早くも友達ができ始めた様子で、式終了をまちかまえる部活動勧誘の諸先輩たちや、新入生同士で和やかに談笑する光景が印象的に映りました。

翌日からのオリエンテーションを経て、翌週からは本格的に授業が始まっています。これからの四年間、新入生にとってはどんな、時間が待ち構えていることでしょう。新入生の皆さんが「ハマルが見つかり」有意義な学生生活となるよう願ってやみません。





写真：左 東本専任講師 右上 坪川教授 右下 認田教授

【学術研究会研究報告会を開催しました】2月4日報告者
 学術研究会では、本学教員の研究を支援するため「個人及びグループ研究助成」事業を行っています。
 まず1月14日、その助成を受けて行われた研究について、三名の教員が、平成26・27年度に行った研究について報告を行い、次に2月4日には個人研究助成一名、グループ研究助成一名の発表が行われ、発表後は活発に質疑応答や充実した報告会になりました。
 なお、発表者と発表内容は、次のとおり。

1月14日報告者

(1) 坪川 弘教授 「地方行政における二元代表制の課題―住民訴訟と議会による請求権放棄問題を素材にして―」

(2) 東本 裕子 専任講師 「日英二言語話者へ使用言語が及ぼす影響 ―言語教育の視点から―」

(3) 認田 はるみ 教授 「観光日本語上級レベルの語彙選定」



写真：グループ研究助成で発表する 田尻講師（左上）、細江講師（右上） 遠山准教授（右下）

(1) 個人研究助成
 小林雅人教授（学長）
 「E-Info 2015 速報―発生前から本格化するまでに、ベルーで起こった異変―」

(2) グループ研究助成
 細江哲志講師、遠山緑生准教授、田尻慎太郎講師
 「社会人基礎力プログラムにおける初年度教育の設計と実践」



財務報告

学校法人横浜商科大学 平成26年度決算及び平成27年度予算

事業活動収支計算書

		(単位:千円)		
		平成26年度 決算	平成27年度 予算	
教育活動収支	収入	学生生徒等納付金	1,138,140	1,195,564
		手数料	20,448	17,890
		寄付金	8,803	6,400
		経常費等補助金	127,862	120,072
		付随事業収入	20,804	16,707
		雑収入	76,963	135,556
		教育活動収入計	1,393,020	1,492,189
教育活動外収支	支出	人件費	916,323	886,386
		教育研究経費	535,618	656,703
		管理経費	238,673	268,223
		徴収不能額等	8,500	0
		教育活動支出計	1,699,114	1,811,312
		教育活動収支差額	△ 306,094	△ 319,123
		受取利息・配当金	17,982	12,000
その他の教育活動外収入	0	0		
教育活動外収入計	17,982	12,000		
借入金等利息	7,398	6,449		
その他の教育活動外支出	0	0		
教育活動外支出計	7,398	6,449		
教育活動外収支差額	10,584	5,551		
経常収支差額	△ 295,510	△ 313,572		
特別収支	収入	資産売却差額	0	0
		その他の特別収入	0	60,550
		特別収入計	0	60,550
		資産処分差額	12,417	21,000
		その他の特別支出	0	0
特別支出計	12,417	21,000		
特別収支差額	△ 12,417	39,550		
〔予備費〕			32,287	
基本金組入前当年度収支差額		△ 307,927	△ 306,309	
基本金組入額合計		△ 20,820	△ 71,278	
当年度収支差額		△ 328,747	△ 377,587	
前年度繰越収支差額		△ 2,137,152	△ 2,626,045	
基本金取崩額				
翌年度繰越収支差額		△ 2,465,899	△ 3,003,632	
(参考)				
事業活動収入計		1,411,002	1,564,739	
事業活動支出計		1,718,929	1,871,048	

資金収支計算書

		(単位:千円)	
		平成26年度 決算	平成27年度 予算
収入の部			
収入	学生生徒等納付金収入	1,138,140	1,195,564
	手数料収入	20,448	17,890
	寄付金収入	8,020	36,400
	補助金収入	127,862	150,622
	資産売却収入	120,006	0
	付随事業・収益事業収入	20,804	16,707
	受取利息・配当金収入	17,982	12,000
	雑収入	76,963	135,556
	借入金等収入	1,800,000	2,400,000
	前受金収入	494,343	429,973
	その他の収入	661,919	53,942
	資金収入調整勘定	△ 588,341	△ 433,505
	前年度繰越支払資金	1,664,263	1,354,876
収入の部合計		5,562,409	5,370,025
支出の部			
支出	人件費支出	926,079	908,073
	教育研究経費支出	434,770	555,896
	管理経費支出	189,057	219,055
	借入金等利息支出	7,398	6,449
	借入金等返済支出	2,084,430	2,442,770
	施設関係支出	16,760	30,000
	設備関係支出	39,809	19,508
	資産運用支出	274,397	0
	その他の支出	812,861	98,000
	資金支出調整勘定	△ 181,090	△ 199,499
	翌年度繰越支払資金	957,938	1,289,773
	支出の部合計	5,562,409	5,370,025

貸借対照表

平成27年3月31日現在

		(単位:千円)		
		資産の部	負債及び純資産の部	
資産の部	固定資産	11,263,759	固定負債	747,154
	流動資産	1,053,950	流動負債	741,361
			基本金	13,295,093
			繰越収支差額	△ 2,465,899
資産の部合計		12,317,709	負債及び純資産の部合計	12,317,709